

英語の学術論文を読んでみよう

科目責任者：井上健一（先端医科学研究センター）

I. 前文

教科書に書かれる医学的知識は、本当に正しいのでしょうか。それらは現時点の「コンセンサス」に過ぎず、10年後の教科書には全く違うことが書いてあるかもしれません。

NatureやNew England Journal of Medicineなどの英語の学術雑誌には、歴史的な発見が現在進行形で掲載されています。そのような学術論文を読むことを通して、自然科学が日々進歩していることを肌で感じてみませんか。

II. 受入可能人数

若干名

III. 担当教員

井上健一（先端医科学研究センター）

小川覚之（先端医科学研究センター）

岸本聡子（先端医科学研究センター）

IV. 学習内容

少人数持ち回りで、学術論文の抄読会（チームラーニング）をします。紹介する論文はこちらで指定しますが、興味深いテーマがあれば自発的に提案することも歓迎します。専門的な内容をはじめから完璧に理解する必要はなく、background・methods・results・discussionという学術論文の構成に慣れてください。読めるようになった次の段階は、methodsやresultsをクリティカル（批判的）に読むことです。かつてNatureのような最高峰の学術雑誌ですら、STAP細胞のような捏造論文が掲載される事件がありました。堅固なエビデンスによって仮説を提唱するとはどういうことかを、早い段階から学ぶのは有益でしょう。また興味深い論文を見つけ出す技術は、将来医局の抄読会でも役に立ちます。履修条件は知的好奇心のみ。現時点の英語力は問いません。

V. 学修の到達目標

英語の学術論文をクリティカルに読み、背景分野の最新の研究進展を把握する能力を養う。

VI. 成績評価の方法・基準

期間を通じた参加回数、発表回数、プレゼンの面白さ、質疑応答への参加状況などを総合的に評価します。

VII. 使用する教材・資料など

学内アカウントでアクセスできる雑誌は自分でpdfファイル・supplementaryデータをダウンロードする。学外取り寄せの資料はこちらで複写を配布します。

VIII. 質問への対応方法

本部棟H301/304（内線番号2207）。決められたオフィスアワーはないので、電話かメールで在室を確認して下さい。

IX. 求められる事前学習、事後学習*（ ）内は所要時間の目安

事前学習：発表担当者は指定された論文を読んで、紹介するレジュメを作成する（2～4時間）。準備負担が大きいと感じるかもしれませんが、医局の抄読会で当番になった場合も全く同じことをします。忙しい中でも時間を捻出するコツを習得して下さい。担当者以外の事前学習はなし。

事後学習：紹介された論文や関連論文を読む（任意）。

X. コアカリ記号・番号

A-8

XI. 課題（試験やレポート）に対するフィードバックの方法

発表者や発表に対する質問について、都度フィードバックする。

XII. 卒業認定・学位授与の方針と該当授業科目の関連

*◎：最も重点を置くDP ○：重点を置くDP

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）		
医学知識	人体の構造と機能、種々の疾患の原因や病態などに関する正しい知識に基づいて臨床推論を行い、他者に説明することができる。	
	種々の疾患の診断や治療、予防について原理や特徴を含めて理解し、他者に説明することができる。	○
臨床能力	卒後臨床研修において求められる診療技能を身に付け、正しく実践することができる。	
	医療安全や感染防止に配慮した診療を実践することができる。	
プロフェッショナリズム	医師としての良識と倫理観を身に付け、患者やその家族に対して誠意と思いやりのある医療を実践することができる。	
	医師としてのコミュニケーション能力と協調性を身に付け、患者やその家族、あるいは他の医療従事者と適切な人間関係を構築することができる。	
能動的学修能力	医師としての内発的モチベーションに基づいて自己研鑽や生涯学修に努めることができる。	○
	書籍や種々の資料、情報通信技術（ICT）などの利用法を理解し、自らの学修に活用することができる。	○
リサーチ・マインド	最新の医学情報や医療技術に関心を持ち、専門的議論に参加することができる。	◎
	自らも医学や医療の進歩に寄与しようとする意欲を持ち、実践することができる。	○
社会的視野	保健医療行政の動向や医師に対する社会ニーズを理解し、自らの行動に反映させることができる。	
	医学や医療をグローバルな視点で捉える国際性を身に付け、自らの行動に反映させることができる。	
人間性	医師に求められる幅広い教養を身に付け、他者との関係においてそれを活かすことができる。	
	多様な価値観に対応できる豊かな人間性を身に付け、他者との関係においてそれを活かすことができる。	